事例No.	2798
公表年度	R5
団体の属性	その他
団体名	田村　寛

事例区分	地域活性化

タグ	・移住定住 ・公共施設活用 ・関係人口

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

再生から進化に向けて挑戦し続けるまち「沼垂テラス商店街」

出典

令和５年度ふるさとづくり大賞事例集

優秀賞



再生から進化に向けて挑戦し続けるまち「沼垂テラス商店街」

田村（たむら） 寛（ひろし）氏

DATA

事　例　名：再生から進化に向けて挑戦し続けるまち
　　「沼垂テラス商店街」
所　在　地：新潟県新潟市中央区沼垂東
連　絡　先：TEL 025-384-4010
　　FAX 025-384-4020
　　E-mail info@nuttari.jp
ホームページ：https://nuttari.jp/

取り組みの概要

シャッター通りと化した「沼垂市場通り」にUターンした田村氏は、「街自体に活気がなければ、個人商店は成り立たない」と奮起し、商店街にかつての賑わいを取り戻すため、「株式会社テラスオフィス」を起ち上げ、青果市場だった趣のある長屋を活用して多様で個性的なショップを出店させていく手法で商店街再生を推進。「ここに来ないと出会えないヒト・モノ・空間」「古くて新しい沼垂」をコンセプトとする「沼垂テラス商店街」を誕生させ、街の歴史・文化・景観等を地域資源として活かしたさまざまな取り組みを行いながら、交流人口の増加、起業の場や移住定住者の創出など地域活性化に貢献し、現在もなお、さらなる進化に向けて挑戦し続けている。

評価された点

●全国でも商店街の衰退が著しいが、新たな文化の創造や雇用創出、商品開発など幅広い展開で商店街の経済を再生させたことにより地域活性へとつながっている点を評価。
●活用されていなかった長屋を商店街として再生させる取り組みを推し進め、にぎわいのあるエリアとして再生させることに大きく貢献した点を評価。
●商店街再生のお手本とも言える事例である。多くのステークホルダーをどのように巻き込んでいったのかに関しての「秘訣」を横展開できると素晴らしい。
●沼垂テラス商店街の誕生、空き家、空き店舗活用によるサテライトオフィス店舗拡大など、地域全体に波及する効果が高い。
●商店街全体の管理運営にとどまらず、地域全体の再生・活性化のための活動を行っている点を評価。
●「街自体に活気がなければ、個人商店は成り立たない」という考え方から、土地建物を一括で買い上げたことに特徴がある。出店してから3年以内に廃業は皆無であり、商店街はレトロモダンに統一され、他の商店街の参考に資するところ大といえる。

取り組みのプロセス

取り組みを実施するに至った要因・背景や地域課題
その取り組みを実施するに至った要因・背景や地域課題について記載。

行政や外部からの支援
行政や外部からの支援などについて記載。

きっかけ　**2010年～**
・シャッター通りと化した「沼垂市場通り」に賑わいを取り戻す活動開始。

・「街自体に活気がなければ、個人商店は成り立たない」と奮起。

2010年～

長屋で開業合同イベント等に取り組む

・地域に変化を起こすため、長屋で惣菜店「ルルックキッチン」開業。
・リノベーション最初期、他2店と中心になって合同イベントを開くなど、活性化に努める。



・長屋への新規出店の制限や管理運営の困難大。

2014年～

長屋の買取会社設立
新商店街の誕生

・市場協同組合から長屋を丸ごと買取。
・長屋の管理運営等のため「(株)テラスオフィス」設立。
・「沼垂テラス商店街」誕生。





・長屋を統一したコンセプトのもとリノベーションを進める。
・1年で全テナントが埋まる。

・外部出店者も多数。

2015年～

地域資源、各店の個性等が融合したイベントの実施

・代表的なイベント「朝市」をはじめ、「冬市」「夜市」などの開始。



・長屋は定員に達したが出店希望が相次ぐ。

・新潟県立大学のゼミ研究と連携して空き家調査。

2016年～

サテライト店舗の開業

・沼垂地域の空き店舗、空き家を活用してサテライト店舗の「沼垂テラス・エフ」開業。



2019年～

コワーキングスペースのオープン

・かつて協同組合の集会所だった場所から新しい文化が生まれてほしいとコワーキングスペース「灯台 -Toudai-」オープン。



今後の展望

・沼垂地域の魅力創出やアピールを続け、興味を持つ人、実際に住んでくれる人をさらに増やし、新しい人が入ることでの変化・動きを生み出し、商店街も進化していくことで地域活性化につなげる。

受賞者のコメント

これまで支えてくれた会社スタッフ・家族・商店街のメンバーや関係者の皆さんの協力がなければ受賞出来なかったと思いますので、本当に感謝しています。大学を卒業し東京から地元に戻り、街の活気が薄れている状態を見て、また肌で感じて「自分が住んでいて楽しい街、子供達がこの地域に住んでいて良かったと思える街」を創りたいという思いから、ここまで駆け抜けてきました。今回の受賞をエネルギーに、もう一段「まちづくり」のステージを上げられるよう努力していきます。